

# 琉球大学学術リポジトリ

## 2013年度友利元島遺跡発掘調査速報

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄科学防災環境学会 公開日: 2022-07-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久貝, 弥嗣, 本村, 麻里衣 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002019397">https://doi.org/10.24564/0002019397</a>

## 2013 年度友利元島遺跡発掘調査速報

○久貝 弥嗣 (宮古島市教育委員会)  
本村麻里衣 (株式会社 アークジェオ)

## 1. はじめに

友利元島遺跡は、宮古島市城辺字友利に位置するグスク時代～近世にかけての集落遺跡である。本遺跡は、これまで、1987 年、1995 年に発掘調査が実施され、いずれの調査でも明和の大津波(乾隆三十六年の大波)による津波堆積層が確認されており、沖縄県内では初めて津波痕跡が発見された遺跡として広く知られている。

宮古島市教育委員会は、3 回目となる友利元島遺跡の発掘調査を、平成 24 年 11 月から平成 25 年 1 月にかけて実施した。今回の調査は、宿泊施設建設に伴う記録保存調査で、約 420 m<sup>2</sup>を調査対象とした。過去 2 回の発掘調査は、いずれも標高約 10m 前後の地点であったのに対し、今回の発掘調査地点は、標高約 4m のインギヤーと呼ばれる海岸線に面した地点で実施した(写真 1)。

今回の発掘調査では、大きく近世、グスク時代、無土器時代という 3 つの時代の包含層と遺構が確認された。これまでの友利元島遺跡は、グスク時代～近世にかけての遺跡として考えられてきたが、今回の発掘調査では、さらに古い時代の無土器時代の包含層が確認された。以下、今回の発掘調査の成果について、各時期ごとの遺構や出土遺物の状況について報告を行っていく。なお、現在は資料整理も始まっておらず、発掘調査作業によってえられた成果についてのみ速報として報告していくため、今後の資料整理によって、その見直しが必要とされてくる場合もあるので、あらかじめご了承ください。

## 2. 近世

今回の発掘調査では、当初の調査方法の関係で、近世の層については一部のみを手掘りで調査を行った。近世に該当するのは、6～8 層と考えられるが、今後砂層、砂礫層の堆積過程や年代測定値の結果もふまえて詳細な検討を要する。

しかし、今回の近世の層からの特筆すべき出土資料として人骨の出土があげられる。人骨は、少なくとも 3 体確認されており、部分的にまもって出土している傾向が認められる。しかし、土壌などの埋葬施設は確認されていない。これらの人骨については、年代測定値の結果も踏まえなければならないが、これまでの調査事例や下層の年代観から、1771 年の明和の大津波に関連する人骨であることが想定される。『御問合書』によれば、友

利・砂川・新里・宮国の集落では、あわせて 2042 名の死亡が記されている。これらの亡くなった人々の遺体の一部は、下地与那覇の前浜海岸一帯にながれつuitたとされている。これまで、明和の大津波による津波堆積層は確認されているものの、その被害にあった人骨などは、出土していないことから、宮古諸島における明和の大津波に状況を示す新たな資料となるものと考えている。

## 3. グスク時代

グスク時代の包含層は、13 層になる。本層は、調査区全面で確認されるものの、出土遺物は非常に少ないのが一つの特徴といえる。出土しているのは、土器、中国産褐釉陶器などである。

## 3-1 遺構

## ①土墳墓 2(ST2)

13 層の上面より掘り込まれており、深さは、30 cm ほどである。土墳墓内には、人骨が 1 体埋葬されている(第 2 号人骨)。人骨は、上半身部分のみの検出となったが、骨の残存状態は非常に良好であった。埋葬姿勢は、仰向けの状態で、両手を胸のあたりで組むようにして埋葬されていた。

形質人類学の観点からは、骨が未癒合の部位も見られることから、年齢は、未成人であると推察されている。性別については、未成人であることから、その特定が困難とされているが、上腕骨などが華奢であることから女性の可能性が高いとされている。推定身長は、右上腕骨の全長が 27.0 cm であることから 146 cm と算出されている。また、日本本土の中世人骨の特徴とされる歯槽性突鰭の傾向も認められている。

その他、人骨の右上腕骨近くからは、カムイヤキの小壺の完形品が 1 点出土している。カムイヤキは、倒れた状態で出土しているが、本来は、右肩部分に立てた状態で副葬していた可能性が高いと考える。カムイヤキの特徴については、後述するが、埋葬人骨への供献品であると推察され、13～14 世紀に位置づけられる資料である。

宮古島市における 14 世紀代の埋葬人骨・遺構の事例としては、外間遺跡第 1 号、4 号、5 号人骨の事例があり、年代測定はなされていないものの住屋遺跡の土墳墓から出土する人骨についても 14 世紀前後のものと想定されている。これらの人骨は、全て台地上の土の遺跡から検出されたもので、砂丘地からの 13～14 世紀の人骨の検出事例は、初

めてものとなる。また、カムイヤキ供献品の事例としては、北谷町の小掘原遺跡において事例が確認される。

### 3-2 遺物

写真5のカムイヤキは、径9.7cm、器高10.2cm、底径8.8cmで小壺に分類される。口縁部は外傾し、最大径が胴部上位に位置して、肩が開く形態を呈している。外器面には、極僅かに平行線文の叩き痕をみることができるが、全体的なナデ調整によって叩き痕は消され無文となっている。肩部にはヘラ記号が付けられている。内器面には、肩部から胴部下位にかけて平行線文当て具痕が密に認められる。新里分類B群(小)壺形Ⅱに分類される資料である。壺内の砂を取り出した際に、肉眼では炭化物などは認められていない。

その他には、これまで明らかな13層から出土した遺物はない。しかし、その上層からは、中国産の褐釉陶器や土器などもわずかであるが出土しており、概ね過去の2回の調査と同様の遺物の範疇として捉えられる。

## 4. 無土器時代

無土器時代の包含層は、15層になる。本層は、調査区の中央部分一帯にのみレンズ状に堆積している。15層の上面においては、土坑が2基、土壇墓1基が確認されており、15層中からは、15点のシャコガイ製貝斧が出土している。

### 4-1 遺構

#### ①土坑1(SK1)

平面形態は、長軸約2.8mで、不整円形を呈す。土層断面はややマウンド状に堆積し、大きく黒褐色砂層と灰褐色砂層の2層に分ける事ができる。両層とも多量のイノシシ骨の他、貝や魚骨等も検出されている。調査区の他の場所に比べサンゴ石

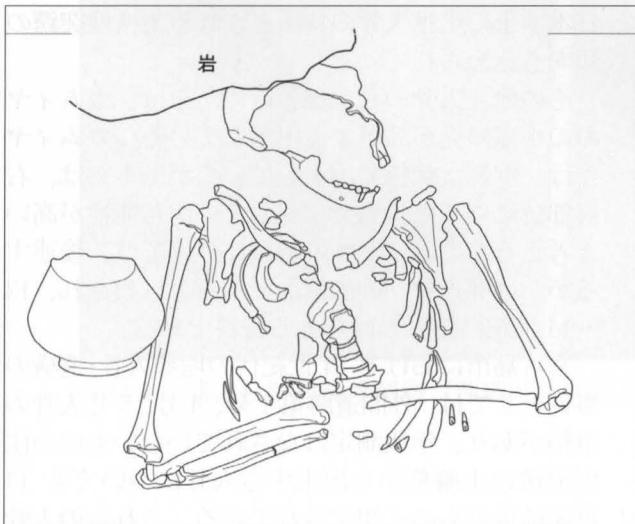


図1 第2号人骨平面図

\*カムイヤキは、図面上で出土位置の復元を行っている。

灰岩が集中していることから「集石遺構」の部類に入るものと思われる(2005 安座間)。サンゴ石灰岩の中には火を受けて黒色に変化したと思われるものが見受けられた。またイノシシ骨の中にも火を受けたと思われるものも混入していた。深さ約0.2m。

#### ②土坑2(SK2)

SK2は、土壇墓2(ST2)の南側より検出された。平面形態は不整円形を呈し、掘り込みがみられた。

層は2層から成り、上層の黒褐色砂層からは脆くなった石灰岩とイノシシ骨、下層の灰黄褐色砂層からは主にイノシシ骨が検出された。地炉(アースオープン)的な性格を持つものと考えられる(1994 野嶋)。長軸約0.5m。短軸約0.3m。

#### ③土壇墓1(ST1)

土壇墓1は、15層の上面より検出された遺構であるが、その掘り込み最上面が15層からなるものか、より上位の層からの掘り込みなのかが、発掘調査の方法上、定かではない。そのため、無土器時代の遺構かグスク時代の遺構なのか現在のところ不明確であることを事前に断っておく。

土壇墓1の埋葬人骨は、仰向けの状態で埋葬されており、左腕は、肩の方へ折りたたむように曲げ、右腕は、「く」の字型をしている。足については、両足とも膝を曲げた状態で埋葬されている。

形質人類学の観点から、この第1号人骨は成人とされるが、その年齢については、今後詳細な検討を行う予定である。左大腿骨の全長が40.0cmであることから、推定身長は、156cmと算出される。腕の三角筋部分や足の素線や発達度合いから男性と考えられる。骨の残存状況が悪く、顔の形態などについては、検出にいたっていない。

土壇墓1内からの人工遺物の出土はないため、この人骨の年代を確認することはできていない。しかし、墳の中には、イノシシの頭骨なども人骨に近接して検出されている。

### 4-2 遺物

15層からは、全部で15点の貝斧が出土している。いずれも、シャコガイの蝶番部分を利用したものである。成形のための内割痕が側面に残され、刃部とその周辺部のみを研磨する局部磨製の技法がとられている。貝斧の大部分は、全長が15~20cm前後のもので占められ、最大のもので約23cmになる。10cm前後の小形の貝斧は、出土していない。これまでの無土器時代の遺跡からは、貝斧の共伴遺物として、スイジガイ製利器や、サメ歯有孔製品、イモガイ製ビーズなどが出土しているが、本遺跡からは、貝斧のみが出土している。

その他、食料残渣であるイノシシ骨が比較的多く出土している。未整理の段階であるが、骨の癒

合状況や歯の咬耗状況などから、若い個体が大部分を占めているように感じる。これらの動物骨や貝類遺体が、明らかに集中して検出される範囲は認められず、全面的に一定量が出土している状況である。ただ、前述したように土坑1には、焼石とともに、火を受けたと思われるイノシシ骨も出土している。その他、アオブダイ属や、ベラ科の魚骨、チョウセンサザエを主体とする貝類遺体が出土しており、遺跡の前面に広がるリーフがその魚場として利用していたことを示している。

## 5. まとめと今後の課題

今回の発掘調査における、重要な成果として、友利元島遺跡がグスク時代と無土器時代の複合遺跡であることが確認された点があげられる。これは、宮古諸島の抱える無土器時代とグスク時代の間の空白期という研究課題を考える上で重要な意味をもっている。これまで、八重山諸島においては、大泊浜遺跡やカイジ浜貝塚などにおいて、両時期が複合している状況が確認されている。しかし、宮古諸島においては、今回の友利元島遺跡が初めての事例となる。無土器時代の年代幅は広く、出土遺物からその年代を推定することはできず、年代測定の結果に頼らざるを得ないのが現在の状況である。そのため、現在の段階で両時期の関係性について考察を行うことはできないが、今後の年代測定の結果を得て、多くのご指導・ご助言を賜りたいと思っている。

さらに細かな視点でみていくと、砂丘地におけるグスク時代の埋葬人骨が確認されたのも宮古諸島で類例がない。多くの埋葬遺構は、比較的居住空間に近くに位置している。しかし、今回の場合、グスク時代の出土遺物自体が少なく、集落の中心地は過去2回の調査が行われた一帯であることが推察される。これらの状況をふまえると、友利元島というグスク時代の集落遺跡においては、居住地とは少し離れた砂丘地に墓域を設けた可能性もある。しかし、今回は1例のみ埋葬人骨の出土のため今後は、集落の空間利用という視点からも更なる調査が求められる。

また、無土器時代の遺跡が宮古島の南海岸から確認されたのも初めての事例である。これまで、宮古島の無土器時代の遺跡は、宮古島城辺地域の東海岸線で多くが確認されている。これは、この

一帯に、内湾上の地形をなした砂丘地が形成され、その前面には、リーフの発達した海域を有しているためだと考えられている。今回の調査地点も部分的ではあるが、砂丘の形成されるやや内湾上の地形に遺跡が立地している。そのため、遺跡の発見された地域はこれまでとは違うものの、環境という点では、ほぼ類似した状況にあるといえる。

最後にもう一つの課題として、津波堆積層の基準があげられる。過去2回の調査は、いずれも海岸線からやや離れた場所にあり、遺構を被覆する形で砂礫層が検出されているため、津波堆積層としての認定が容易であったといえる。しかし、今回の調査地点は、海岸線に非常に近いことから、海岸線沿いの自然堆積層と、津波堆積層の違いが困難な状況であった。堆積層のサンプルの砂礫のサイズの違いや海岸線の砂丘層との比較検討を深めていくことが、今後の大きな課題の一つであろう。

## 参考文献

- 安座間 充 2005 「沖縄貝塚時代集積遺構集成」『紀要伊仙町教育委員会 2005 『カムイヤキ古窯跡群Ⅳ』  
沖縄埋文研究』3 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 野嶋洋子 1994 「石蒸し焼き料理法の諸相—オセアニアにおける調理の民族考古学的研究に向けて」『民族学研究』59-2 日本民族学会
- 2005 「焼石調理の民族誌—礫群研究の民族考古学的研究」『考古学ジャーナル』No. 531 ニューサイエンス社
- 2007 「集石の民族誌—石焼調理の特徴と先史学的意義—」『縄文時代の考古学』5
- 北谷町教育委員会 2012 『小掘原遺跡』
- 八木澤一郎 2007 「集石遺構とその機能—九州島の状況から」『縄文時代の考古学』5
- 江上幹幸・松葉崇(編) 2003 『アラフ遺跡調査研究Ⅰ—沖縄宮古島アラフ遺跡発掘調査報告—』アラフ遺跡調査団 六一書房
- 沖縄県教育委員会 1986 『下田原貝塚・大泊浜貝塚—第1・2・3次発掘調査報告—』
- 沖縄県教育委員会 1994 『竹富町カイジ浜貝塚—竹富町一周道路建設工事に伴う緊急発掘調査報告—』





写真1 友利元島遺跡近景



写真2 発掘調査現場近景



写真3 第2号人骨検出状況



写真4 第1号人骨検出状況



写真5 カムイヤキ出土状況



写真6 シャコガイ製貝斧出土状況



写真7 土坑1検出状況

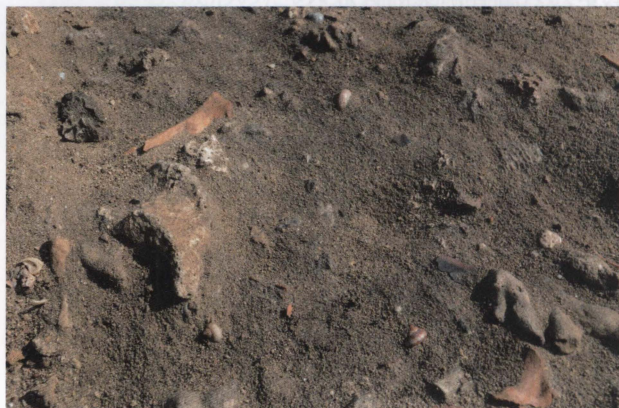


写真8 土坑1内の遺物出土状況